

地域づくり支援プロジェクト 多自然居住地域における 地元住民との地域づくり

兵庫県内の多自然居住地域では、人口減少や少子高齢化が深刻化し、地域産業の衰退や自治機能の低下が大きな課題となっています。このような課題に対し、ひとはくでは、地域に存在する資源を見直し、地域資源を産業やコミュニティの根幹に再構築する地域づくり支援に取り組んでいます。

例として、かつて鉱山まちとして栄えた養父市大屋町明延には、鉱山関係の文化遺産が点在していますが、閉山後過疎化が進行し、まちづくりの担い手不足や景観の悪化が課題となっています。このような中、地元住民らが組織した「NPO 法人 一人電車あけのべ」とともに、交流人口を増やすためのイベントを試行しながら、担い手づくりの支援を行っています。また、空き家となった鉱山社宅を修繕・活用したまちづくりの新たな拠点整備や、地域の文化遺産の保全に対する認識について協働調査を実施するなど、景観保全に向けた取り組みも行っています。

一方佐用町では、農業など地域産業の担い手不足が大き



1. 鉱山社宅での模型づくりWS(明延) 2. 鉱山社宅屋根のペンキ塗り(明延) 3. 畦畔の防草実験のモニタリング調査(佐用町) 4. 薬草栽培の勉強会(佐用町)

な課題となっています。そこで、地元農家から成る「佐用町薬草振興会」とともに、薬草栽培の勉強会や先進地域の視察などを実施しながら、漢方薬メーカーとの契約栽培を視野に入れた薬草の産地化や薬草を加工した商品開発によって地域振興や雇用機会を創出する検討を行っています。さらに、畦畔での除草の労力軽減に向けて、マルチングシートと薬草の植栽による雑草の抑制効果を把握する実験を実施してきました。

ミツカンよかわビオトープ倶楽部の運営 食品工場に併設されたビオトープで 活動グループを支援し、 地域と企業をつなぐ

里山風景が広がる自然環境の中に建つ、ミツカン三木工場(ミツカングループ・本社 愛知県半田市)。工場建設当時のミツカングループ担当者は「この豊かな自然を極力残したい。ビオトープをつくらう。そして地元の人たちに育ててもらおう」と考えました。ひとはくは、その「ミツカンよかわビオトープ」の計画づくり(2003年)から、地域住民による活動組織、ミツカンよかわビオトープ倶楽部の立ち上げ及び運営を支援しています。倶楽部は月1度の例会を10年以上継続し、ビオトープの管理作業のほか自生するコバノミツバツツジを愛でる「アザレアの宴」や地域の子どもの対象にした「夏の夜の虫観察会」、地元公民館とのお月見、吉川町文化祭出展などを企画・実施しています。小さな子ども連れで参加する家族もあり、中間の輪の中心で子どもたちはみんなのアイドルになっています。

このプロジェクトはミツカンのほか、ビオトープを整備した鹿島建設株式会社、計画やモニタリング調査を担った株式



1. 自生するコバノミツバツツジ 2. 畑で水やり 3. 湿地ビオトープ 4. 航空写真

会社 里と水辺研究所など、ひとはくの他にも多様な専門家が連携することで成立しました。そしてその関係者が集い「食品工場のビオトープにおける住民・企業・専門家協働型の計画・運営に関する研究」として日本造園学会でも発表(2015年)しました。今後もひとはくは継続して支援しつつ、他の工場や企業でもこのような「ビオトープを通じた地域との良い関係づくり」の仕組みを構築していく予定です。

『北摂里山博物館構想』の推進 SATOYAMAの 保全・活用を目指して 国際交流事業の総合支援を担う

兵庫県北摂地域(三田市、宝塚市、猪名川町、川西市、伊丹市)には素晴らしい里山が数多く分布しています。その中には「日本一の里山(※)」と称されているものもあります。『北摂里山博物館構想』は兵庫県阪神北摂民局が中心になって策定。自然豊かな北摂地域の全体をエコミュージアム(北摂里山博物館)として整備し、地域内の自然環境、特に里山を積極的に保全・活用していくことを目指しています。ひとはくは里山に関する豊富な専門知識を活かすことで本構想の策定に協力しました。また、策定後も阪神北摂民局や北摂里山博物館運営協議会をはじめとする様々な主体(市町、市民団体、民間企業など)と連携しながら本構想の実現に向けた取り組みを推進しています。

このような取り組みの一つが、北摂里山博物館運営協議会の活動支援です。ひとはくは、講師を派遣するなど、本協議会が主催する事業(北摂里山大学、こども北摂里山探検隊、北摂里山サポーターズクラブ、北摂里山魅力づくり応援事業など)に様々な形で協力しています。このことは阪神北摂民局が主催す



1. 北摂 SATOYAMA 国際シンポジウム：エクスカーション(川西市黒川地区) 2. 北摂 SATOYAMA 国際ワークショップ 3. 北摂里山サポーターズクラブ：エドヒガン群生地を訪問(川西市黒川地区) 4. 北摂里山大学の講座：里山放置林の整備実習

る事業にもあてはまります。本県民局は国際交流事業を積極的に進めており、北摂 SATOYAMA 国際シンポジウム(2014年度)、国際セミナー(2015年度)、国際ワークショップ(2016年度)を開催。ひとはくはこれらすべての事業に協力し、講師やファシリテーターなどを務めました。

※日本一の里山：川西市黒川地区の里山。池田炭(茶道用の高級炭)の生産を目的に現在も伝統的な方法で利用されている。台場クヌギの存在や歴史の長さ、生物多様性の高さなど総合的な観点から日本一と評価されている。

『生物多様性協働フォーラム』の枠組みを活用した 生物多様性の普及・啓発 生物多様性の課題解決に向けた 情報発信、協働のきっかけづくり

生物多様性協働フォーラムは、「生物多様性の保全と持続可能な利用の実現を目指して、関西からその先進事例を発信し、新しい提案を行うこと」を目的に、ひとはくが三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社、特定非営利活動法人西日本自然史系博物館ネットワークと協働で実施しているものです。各回とも旬のテーマを設定し、上記の3団体だけでなく企業・行政・研究機関・市民団体などの多様な主体に参加を呼びかけ協働で開催しています。また聴講者同士の交流が生まれるよう、講演だけでなくブース出展も行っているのが特徴です。この5年間に表のように10回のテーマでシンポジウムを開催し、のべ2,914名の方に聴講いただきました。

2017度は10回までの成果を文章にまとめ、より多くの方々に生物多様性の保全と持続可能な利用の実現にむけた協働に参加していただけるようにアピールします。また、これまでの実績を踏まえて、より実践的な知見を生み出すための新事業を多様な主体とともに検討する予定です。



1. 第3回フォーラムは兵庫県公館で開催。関西における生物多様性戦略の展望をテーマに、井戸広域連合長、嘉田広域環境保全担当委員(当時)、岩槻館長(当時)による鼎談も行いました。2. パネルブース：参加者による活発な交流の様子(第8回)

■これまでのフォーラムのテーマ、実施年月、聴講者数

回	テーマ	実施年月	聴講者数
1	企業・地方自治体ととりまく生物多様性の最新動向と事業インフラを活用した生物多様性CSRの展開	2011年8月	185
2	企業の持続性を高める生物多様性の理解	2011年10月	147
3	社会の『つながり』を活かした取り組みの展開	2012年2月	450
4	『農・林・海』の場における生物多様性を維持・利活用し続けるためのしくみ	2012年8月	300
5	グリーンビジネスでつなげる『都市生活』と『生物多様性』	2012年11月	125
6	共生のビジョンを広域的な視点から考える	2013年1月	300
7	いのちにぎやか、文化ゆたか。～いのちと文化の共鳴をよみがえらせる～	2013年12月	501
8	ウナギの未来をつなげよう～うまいもんが結ぶ人の縁、水のつながり、生きもののからし～	2014年12月	420
9	テクノロジーが切り拓く 生物多様性の未来	2015年12月	136
10	生物多様性のためのソーシャルデザイン	2016年12月	350